

# 小学校の学びを生かしつつ、主体的な読みを 深める中学校国語学習の在り方

—他者との交流から多角的思考力と重層的思考力を高める授業の工夫—

後藤亨朗・徳山智夫・藤木寛子・四十塚都・小林 藍

## はじめに

本研究は、岡山大学教育学部附属学園（幼小中）一貫教育研究における附属中国語科の「総まとめ」となる研究であった。本稿は上記の研究論文を再編し、次の研究主題へと繋がる今後の課題や新たな視点を述べるものである。

## 1 主題設定の理由

### (1) 本校国語科のこれまでの研究との関連から

本校の国語科では、岡山大学教育学部附属学園（幼小中）一貫教育共通研究主題「考える力を育てることばの教育」のもと、平成24年度に「小学校の学びを生かしつつ、主体的な読みを深める中学校古典学習のあり方」、平成25年度に「小学校の学びを生かしつつ、主体的な読みを深める文学的文章の学習のあり方」、平成26年度に「小学校の学びを生かしつつ、主体的な読みを深める説明的文章の学習のあり方」という研究を行ってきた。これらは、「小学校の学び」を生かしつつ、生徒が様々な文種の文章を主体的に読み進めていく学習のあり方を追求したものである。

今回の研究は、上記のこれまでの研究を踏まえ、様々な文種において生徒の「主体的な読みを深める」ために行った授業改善を基盤に、他者との交流による生徒の「考える力」の深化を目指す授業を提案するものである。

### (2) 生徒の現状と課題

現行の「小学校学習指導要領」の第2章・第1節「国語」における第5学年及び第6学年「C読むこと」の指導では、音読や朗読に加え「目的に応じて、本や文章を比べて読むなどの効果的な読み方を工夫すること。」「目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読んだりすること。」とある。小学校では、音読や内容の把握だけにとどまらず、読み方を意識した学習を積み重ねてくると思われる。そして、中学校では、それらの学習を整理・体系化し、「方法」として活用できるようにすることが必要であると考ええる。

また、古典学習については、平成20年1月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」には、「7 教育内容に関する主な改善事項」の「(3)伝統や文化に関する教育の充実」で以下のように述べてある。

国際社会で活躍する日本人の育成を図る上で、我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、そのよさを継承・発展させるための教育を充実することが必要である。世界に貢献するものとして自らの国や郷土の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身に付けてこそ、グローバル化社会の中で、自分とは異なる文化や歴史に敬意を払い、これらに立脚する人々と共存することができる。

また、伝統や文化についての深い理解は、他者や社会との関係だけではなく、自己と対話しながら自分を深めていく上でも極めて重要である。

ここには、古典を学習する意義が述べられている。様々な価値観を持つ人々と共に生きる国際社会において、文化も歴史も自分と異なる存在を認めて共存していくには、確かな自己を持っていなければならない。日本人としてのアイデンティティを確立するためには古典を学習することが重要になるというのである。これも中学校国語学習の在り方の一つだろう。

このような学習を積み重ねる生徒に対して、発展的な学習として、様々な文種の文章で他者との交流を図りながら「考える力」を深化させる学習をすることが、小学校での国語学習を生かしつつ行う中学校ならではの国語学習になるのではないかと考えている。

### (3) 目指す生徒像

岡山大学教育学部附属学園（幼小中）一貫教育では、「考える力を育てる」ために「ことば」に対して「対象をとらえる」「他者とつながる」「自己を見つめる」という三つの観点を設定している。この三つの観点に沿って、国語科の授業で生徒が「ことば」を活用している姿を描くものとして、次に示す表1「国語科ステージマップ」を、これまでの幼小中一貫教育研究で作成した。本稿では、小学校5年生～中学校1年生に当たるV期と、中学校2年生～中学校3年生に当たるVI期のみを掲載する。

表1 国語科ステージマップ V期（小5～中1）Ⅵ期（中2～中3）

発達段階	対象をとらえることば	他者とつながることば	自己を見つめることば
V期	<p>学習材の内容に対する感銘や疑問、表現の仕方に対するひらめきや疑問とこれまでの国語学習をもとに、推測、比較、批評等の思考を学習材に対して働かせながら、その結果を主に論理的な言葉、学び方の言葉・「方法」、あるいは図などで表すことができる。</p> <p>そして、学習材の価値的内容をイメージ豊かにとらえたり、作者の表現意図を分析的にとらえたりすることができる。</p>	<p>お互いに根拠をもとに組み立てた考えや意見を学び方の言葉・「方法」、話型や周辺言語、図などを用いて表すことができる。</p> <p>そして、自分や友達の考え・意見を比較したり、組み合わせたりしながら学習課題の達成に向け、合意形成をめざして伝え合うことができる。</p>	<p>学習材の価値的内容や作者の表現意図をとらえた自分たちの考えやこれまでの友達とのかわり方を主に論理的な言葉や学び方の言葉・「方法」、あるいは図などを用いて表すことができる。</p> <p>そして、自分の成長やこれまでの学び方などの有用性を認めたり、学び方から新たな課題を認識して解決のための合理的な計画を立てたりすることができる。</p>
Ⅵ期	<p>作者や関連する他作品等の学習材に関するあらゆる情報とこれまでの国語学習をもとに、予想、比較、批判、自問などの思考を学習材に対して働かせた結果を、主に表現技法や「方法」等の共通に認識された言語、あるいは図・表などで表すことができる。</p> <p>そして、学習材の独自性や価値・意義という本質を多角的・重層的にとらえることができる。</p>	<p>お互いが書いたり話したりしながら主張する意見を「方法」等の共通に認識された言語や、周辺言語、図・表などを用い、相手、目的、条件等に応じて表すことができる。</p> <p>そして、お互いの意見の論拠及び、前提の一般性や客観性、妥当性等を吟味したり、妥協点を見出したりしながら、学習課題の解決に向け、合意形成をめざして伝え合うことができる。</p>	<p>学習材の本質をとらえたり、友達とかかわってきたりしたことを「方法」等の共通に認識された言語、あるいは図・表などを用い、相手、目的、条件等に応じて表すことができる。</p> <p>そして、自分や友達の成長を認めたり、お互いの成長から新たな課題を認識して解決のための合理的な計画を立てたりすることができる。</p>

また、「社会の変化に対応する資質や能力を持った主体的な学習者」を育成するために、国語科では、言語的リテラシーや情報リテラシー等の基礎基本を充実させながら、多角的思考力や重層的思考力という「考える力」を的確に育て、「確かな学力」を修養させることを目標としている。

さらに、「他者と円滑に人間関係を構築する能力」や「他者と協調したり、利害の対立を御し、解決したりする能力」を「他者との交流」によってスキルアップさせることで、「豊かな人間性」を培うことも目標としている。

これら(1)～(3)のことを踏まえ、本研究主題を設定した。

## 2 本研究における「考える力」と「ことば」

### (1) 国語科の想定する「考える力」について

本校国語科では、岡山大学教育学部附属学校園（幼小中）一貫教育共通研究主題にある「考える力」を「対象を俯瞰する力」とし、その要素とし

て「多角的思考力」と「重層的思考力」の二つの力を想定している。

#### ○ 「多角的思考力」と「重層的思考力」について

国語科では、高い所から広く全体を見渡す力を「俯瞰する力」として  
いる。この「俯瞰する力」には、二つの視点があると考えられる。一つ  
は、対象自体の全体像を見渡す場合に用いられる力である。もう一つは、  
対象を含む集団の全体像を見渡す場合に用いられる力である。本研究で  
育成しようとする「多角的思考力」と「重層的思考力」とは、この二つ  
の力を指している。つまり、俯瞰する対象について、その対象が内包す  
る様々な要素を見渡す力が「多角的思考力」であり、その対象を含む集  
団の全体像を広く見渡す力が「重層的思考力」である。「多角的思考力」  
は、「対比的」な考え方や価値評価等に、「重層的思考力」は、総合（帰  
納）的・分析（演繹）的な考え方に結びつくとも考える。

### (2) 国語科の想定する「ことば」について

前項 1(3)目指す生徒像 の中で述べているため、詳述は避けるが、本研  
究で国語科が想定する「ことば」は「対象をとらえる」「他者とつながる」  
「自己を見つめる」という三つの観点の「ことば」である。授業では、こ  
の三つの観点到に注目して「ことば」を活用する場面を取り入れる。具体的  
には、生徒は、授業において「対象」である学習課題を解決するために、  
学びの現場にいる友達や教師などの「他者」とつながり、学習課題を解決  
するというものである。そして、自己を振り返り自己の成長を認めると同  
時に、次なる課題を設定すると想定している。この「ことば」を活用する  
授業は、本校国語科が提案してきた、「既知の学びを自ら整理して、未知  
の学びに自ら取り組む」という「主体的な学習」であると言えよう。

## 3 「他者との交流」に関わる本校のこれまでの取り組み

国語科では、全学年に共通する学習形態として「班学習」を行っている。こ  
の「班学習」の目的は、班内での意見交換を通して、「他者」を正確に理解  
する能力や「自己」を豊かに表現する能力を養うことである。さらに、「言  
葉によって自己や他者を変えていく能力」が育つものと考えている。

以下に本校国語科の「班学習」について、その具体と3年間の指導計画の  
概要を記す。

#### ○ 附属中が行ってきた班学習

##### ① 構成

班は生活班を使っている。一班5人×8班である。（ただし1年生  
は36人学級のため、一班5人×4班と一班4人×4班である。）

班の編成は、投票によって選ばれた班編成委員が行う。(担任も助言を行う)

複数の教科が生活班を使った班学習を行っているため、「班学習ができる班」という観点でも班編成を行っている。

## ② 座席

授業は基本的に班座席で行っている。授業開始時に実施する漢字テストの時も班座席である。

前の授業が終わると、生徒は自分たちで班座席にして待っている。

## ③ 相談の仕方

流れは、個人→班→全体→個人を基本にしている。

個人でノートに自分の考えを書かせる。→ 班の中でノートを時計回りに回覧する。→ 回覧したものをもとに、班で話し合う。  
(ノートに班の考えを書かせる)

上記のような流れが多い。個人の考えを班の中で埋没させないためである。ただし、知識の確認をする場合(考える時間を必要としない場合)は、いきなり班で聞き、テンポ良く授業を進めることもある。

## ④ 発表の仕方

相談ができた班は、班員全員で手を挙げる。全員挙がっていない班は、指名しない。

「○班。」とこちらが指名すると、指名された班の1人が起立して答える。

生徒には、「班の中で誰が発表するか、それを考えるのも勉強である。どうするかは班で考えるように。ただし、個人の活躍の場を保証することを条件にする。」と伝えている。

ただ、「手を挙げる」ことが目的化すると、班員全員が理解できていないのに、挙手をする場合も出てくるので、「○班の△君。」と、こちらが意図的に個人を指名することもある。

## ⑤ 記録

授業の終わりに「個人の記録」と「班の発表記録」とを記入させている。「個人の記録」は、授業の最初に行った漢字テストの得点および、個人での挙手回数(班員全員で挙手をした回数を含む)を記録させている。「班別学習記録」は、班の中で順番を決めて1時間につき1人が記録する。「班別学習記録」にある「発表・累計」は、その時間に班で指名された回数とその累計である。これは、授業者が指名に偏りがいないかを確認するためのものでもある。

## ○ 指導計画の概要

国語科の「班学習」では、生徒の成長に応じ、期待される意見交換の種類や思考の幅、論証の能力等が異なってくる。以下に、その指導の概要を記す。

表2 班学習の指導計画（概要）

学年	主な論理的思考	期待される班内の交流	学習課題を設定する際の考え方
1	予想・比較・分析・総合 △ロジックの理解	ルールに則った基本的 交流 受容的態度を基本とし た交流	共通点や相違点等の気付きを促 す課題 (能力の育成を主眼とした課題)
2	予想・比較・分析・総合 批判・帰納・演繹等	課題解決のための最善 の交流	様々な事項を結びつけた段階的 な思考により構築される答えを 求める課題
3	△ロジックの活用	批判的態度も許容する 交流	(能力の活用を主眼とした課題)

## 4 「考える力」の育ちの検証について

今回は、特に、「『多角的思考力』と『重層的思考力』の育ち」を中心に調査する。以下、研究の全体構想と調査の経緯や配慮した点を示す。

### (1) 研究目標

学習指導要領の改訂を踏まえ小中の国語科指導の役割分担を明らかにし、生徒が主体的に作品の世界を味わい、自身の読みを深める中学校国語学習の在り方を提案する。

### (2) 研究計画

- ① 対象生徒 本校生徒（第1学年・第2学年・第3学年）
- ② 研究領域 作品に対する主体的な読みを深める生徒の育成
- ③ 研究方法 情報収集、先行研究の調査、全体構想にもとづく授業実践、検証、まとめ
- ④ 検証方法 2回実施する検査問題による生徒の学習状況の分析

### (3) 研究の全体構想

これまでの研究の全体構想は、以下のものである。

Iの観点に立って教材を作成・選定し、IIを豊かに活用する授業構想の基に指導すれば、主体的な読みを深める生徒を育成できるはずだ。

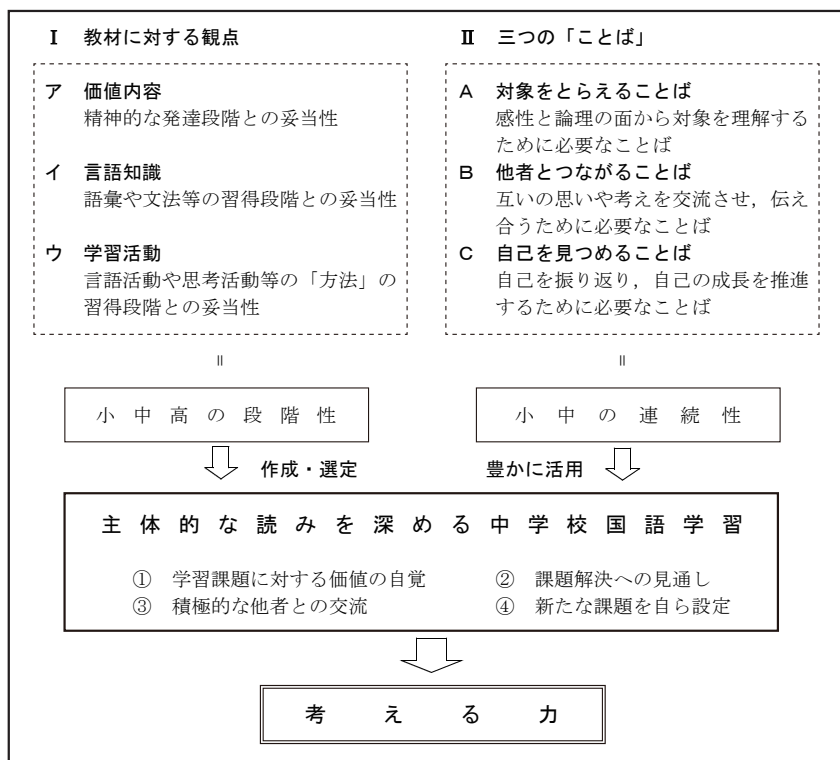


図2 「主体的な読みを深める生徒」を育成する全体構想

#### (4) 調査の実際

##### ① 調査内容

本研究では、以下の2点について調査する。

ア 岡山大学附属学園幼小中一貫教育研究主題「考える力を育てることばの教育」のもと、取り組んできた国語科の「主体的な読みを深める生徒の育成を目指す授業」が、本校生徒の「考える力」(多角的思考力・重層的思考力)の定着に有効であったか。

イ 国語科が取り組んでいる班学習を基盤とした「他者との交流」を推進させていく授業の工夫が、本校生徒の「考える力」(多角的思考力・重層的思考力)の定着に有効であったか。

##### ② 調査の経緯と配慮した点

##### ■調査の方法

あとに示す「検査問題」を提示し、一定時間の中で各自の答えとその判断理由とを自由記述させる。



- ◇問一「作品からどんなテスト問題を作るか」では、  
学習すべき内容をどんな観点から捉えているかを調査する。
- ◇問二「最もよい問題はどれか」では、  
どんな観点を本質的なものと考えているかを調査する。

## ■調査の時期と対象生徒

時期：1回目 平成27年5月      2回目 平成27年12月頃

生徒：本校（1～3年：580名）

他校（1～3年：約300名）

\*他校：一般的な指導過程で授業を行っている公立中学校（2校）

## ■集計の方法

生徒の調査問題を次のⅠ～Ⅲの観点で集計する。

- Ⅰ 問一で作成した問題について、一人あたりの問題作成数の平均値を算出する。
- Ⅱ 問一で作成した問題を、個々の短歌についてのみの問題、二つの短歌にまたがる問題、三つの短歌にまたがる問題とに分類する。
- Ⅲ 問一・問二で作成・選択した問題を以下のように分類する。

◆問一・問二で作成・選択した問題を、以下のア～エに分類する。

ア「言語知識のみを問う問題」

イ「内容のみを問う問題」

ウ「表現の工夫（技法・「方法」）名を問う問題」

エ「表現の工夫と内容等とを関連させた問題」

◆さらに、アをA～Cに分類し、イをD～Hに分類する。

A：漢字、語彙に関する問題

B：文法に関する問題

C：短歌のきまり等に関する問題

D：登場人物の気持ちを問う問題

E：読者の気持ちを問う問題

F：作者の意図を問う問題

G：テーマに関することを問う問題

H：その他、内容に関して問う問題

◆その集計結果を別紙（集計結果用紙）に表として示す。



### ③ 1 回目の調査の集計結果

I 問一で作成した問題について、一人あたりの問題作成数の平均値を算出する。

検査問題 I	本校 1 年	本校 2 年	本校 3 年	他校 1 年	他校 2 年	他校 3 年
平均作成数	3.73	3.93	4.94	3.36	2.81	3.01

(図 4)

検査問題に示された短歌に対する問題作成数は、一つの短歌についてであっても、多ければ多いほど、様々な観点でその短歌を捉えたことになり、「多角的思考力」の表れと考えることができる。本校の平均問題作成数は4.2問、他校の平均問題作成数は3.1問である。

II 問一で作成した問題を、個々の短歌についてのみの問題、二つの短歌にまたがる問題、三つの短歌にまたがる問題とに分類し、その一人あたりの問題作成数を求める。

検査問題 I	本校 1 年	本校 2 年	本校 3 年	他校 1 年	他校 2 年	他校 3 年
個々の短歌	2.87	2.42	3.21	2.61	2.09	3.21
二つの短歌	0.03	0.06	0.11	0.02	0.02	0.01
三つの短歌	0.82	1.46	1.62	0.73	0.90	1.01

(図 5)

上の表に示した数値から、個々の短歌についての問題が最も多いことがわかる。二つの短歌、三つの短歌についての問題は「重層的思考力」の表れと考えられる。個々の短歌についてのみの問題が多くなる傾向は、本校でも他校でも共通するものである。

III 問一・問二で作成・選択した問題を以下のように分類する。

表3 検査問題における生徒が作成(選択)した問題の観点別割合(%)の集計(図6・7)

		問一 あなたが先生ならどんな問題を？					問二 その中で最もよいと思う問題は？				
		本校 1年	本校 2年	本校 3年	本校 計	他校 計	本校 1年	本校 2年	本校 3年	本校 計	他校 計
ア	言語知識のみを問う問題	11	23	6	13	26	9	13	0	7	20
	A:漢字、語彙に関する問題	5	6	0	3	9	4	0	0	1	7
	B:文法に関する問題	1	10	0	3	10	1	5	0	2	7
	C:短歌のきまり等に関する問題	5	7	6	7	7	4	8	0	4	6
イ	内容のみを問う問題	58	31	40	43	52	49	31	25	35	48
	D:登場人物の気持ちを問う問題	3	1	0	1	1	3	2	0	2	1
	E:読者の気持ちを問う問題	4	5	0	3	4	8	7	2	6	6
	F:作者の意図を問う問題	11	7	26	13	9	14	9	13	12	8
	G:テーマに関することを問う問題	11	4	4	7	6	11	3	3	5	6
	H:その他、内容に関して問う問題	29	14	10	19	32	13	10	7	10	27
ウ	表現の工夫(技法・[方法])名を問う問題	8	24	9	14	6	10	30	3	14	10
エ	表現の工夫と内容等とを関連させた問題	23	22	45	30	16	32	26	72	44	22

エは「多角的思考力」の表れと考えられる。なぜなら、表現の工夫から、語り手の心情、作者の意図などを考えさせようとする問題は、一つの表現を様々な観点から捉えようとする問題であると考えられるからである。しかし、問一、問二のどちらにおいても、イが最も多くエはあまり多くはない。この傾向は、本校でも他校でも共通するものである。つまり、中学生は表現の工夫よりも登場人物の気持ちや作品のテーマ等の内容面に注目しがちであると言えよう。

国語アンケート調査問題 I

問一 問一で作った問題の中で、最もよい問題だとあなたが思ふのはどの問題ですか。一つ選んで、アイキの記号を○でこんでください。(もしも、もっとよい問題を感じた場合は、回答用紙の「フ」の所に書いてください。)

問二 問二で、その問題を「最もよい問題」と考えたのはなぜですか、その理由を、できるだけ詳しく説明してください。(4分)

問一 クラスのみんなに、これらの短歌に関するテストをしようと思います。あなたが先生ならどんなテスト問題を作りますか。その問題文をできるだけたくさん書いてください。ただし、答えはいりません。(5分)

問二 次の①②③の作品は、(佐々木)が作った三つの短歌です。あなたのクラスで、国語の時間にこれらの短歌についての勉強をします。まず、①②③の短歌を静かによく読んでください。

① ストレートヘアでひらひらと舞うもんしる様のような女生徒

② ペンキの桶その前に制服のお尻並べている中学生

③ ビストルの音 いっせいにスタートをきる少女らは風よりも風

(6分)

図3 検証のための検査問題

1 回目の調査結果から、以下のような全体的な傾向が読み取れる。

- 作成した問題をア～エに分類すると、イ「内容」が最も多く、ウ「表現」  
エ「表現と内容」が少ない。

**\*多角的思考力が弱いのではないか**

- 1 年生では本校でも他校でも、「短歌を作りなさい」という問題が多い  
ため、イ H「その他」が多くなる傾向にある。

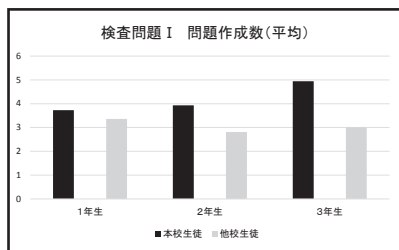


図4 生徒一人あたりの問題作成数の平均値の比較

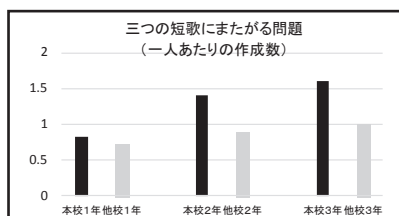


図5 三つの短歌にまたがる問題の生徒一人あたりの問題作成数の比較

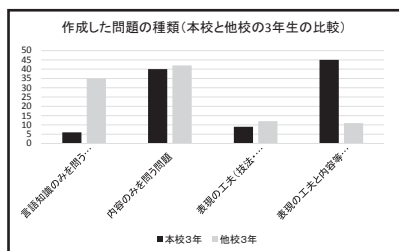


図6 作成した問題の種類(3年生)

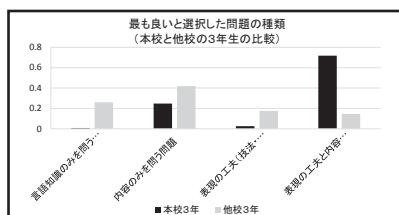


図7 最も良いと選択した問題の種類(3年生)

### \*小学校の授業の影響が大きいのか

また、学年間、学校間での差が明らかである項目に注目すると、「図4 一人あたりの問題作成数の平均値」では、学年が上がるにつれ、本校と他校との差が顕著となっている。

「図5 三つの短歌にまたがる問題の一人あたりの作成数」でも、学年が上がるにつれ、本校と他校との差が顕著となっている。

左下の「図6 作成した問題の種類の比較(3年生)」では、ア「言語知識」とエ「表現と内容」における差が顕著になっている。

さらに、「図7 最も良いと選択した問題の種類の比較(3年生)」では、問二の「最も良いと思うものを選択した問題」で選択された問題のうち、エ「表現と内容」を選択した生徒の割合でも、学年が上がるにつれ、本校と他校との差が顕著となっている。

いずれも多角的思考力や重層的思考力の育ちに、本研究における「授業構想の工夫」や「他者との交流」が有効であったとも考えられるが、2回目の調査結果との比較によって検証したい。

なお、2 回目の調査結果との比較は、

「図4 一人あたりの問題作成数の平均値」、「図5 三つの短歌にまたがる問題の一人あたりの作成数」、「図6 作成した問題の種類の比較（3年生）」の3点から行うこととした。

#### ④ 2回目の調査の集計結果

I 問一で作成した問題について、一人あたりの問題作成数の平均値を算出する。

検査問題 I	本校 1 年	本校 2 年	本校 3 年	他校 1 年	他校 2 年	他校 3 年
平均作成数	4.84	4.91	5.79	3.52	3.41	3.43

(図8)

本校の平均問題作成数は5.1問（5月時点では4.2問）、他校の平均問題作成数は3.4問（5月時点では3.1問）である。

II 問一で作成した問題を、個々の短歌についてのみの問題、二つの短歌にまたがる問題、三つの短歌にまたがる問題とに分類し、その一人あたりの問題作成数を求める。

検査問題 I	本校 1 年	本校 2 年	本校 3 年	他校 1 年	他校 2 年	他校 3 年
個々の短歌	3.11	3.55	3.59	2.88	2.81	2.82
二つの短歌	0.05	0.06	0.11	0.03	0.04	0.04
三つの短歌	0.95	1.64	2.09	0.96	0.95	0.96

(図9)

上の表に示した数値から、本校と他校の結果の特徴が見て取れる。他校の特徴は、学年間の変化がほとんど見られないところであろう。一方、本校の結果では学年間での変化が著しい。特に複数の短歌にまたがる問題の作成数において、1年生と3年生の差が顕著である。複数の短歌にまたがる問題の作成は、「重層的思考力」の表れと考えられる。

III 問一・問二で作成・選択した問題を以下のように分類する。

表4 検査問題における生徒が作成(選択)した問題の観点別割合(%)の集計:12月 (図10)

		問一 あなたが先生ならどんな問題を？					問二 その中で最もよいと思う問題は？				
		本校 1年	本校 2年	本校 3年	本校 計	他校 計	本校 1年	本校 2年	本校 3年	本校 計	他校 計
ア	言語知識のみを問う問題	8	14	5	9	30	4	11	1	5	29
イ	内容のみを問う問題	48	25	22	32	52	51	22	13	29	50
ウ	表現の工夫(技法・「方法」)名を問う問題	20	32	5	19	11	30	36	1	22	15
エ	表現の工夫と内容等とを関連させた問題	24	29	68	40	7	15	31	85	44	6

エは「多角的思考力」の表れと考えている。本校では、エの割合が学年が上がるにつれて確実に上がることが分かる。「多角的思考力」が鍛えられていると考えているが、「5月」の調査結果との比較から検証したい。

#### ⑤ 2回(5月/12月)の調査結果の比較

全体の傾向として、学年が上がるにしたがって本校生徒と他校生徒の数値の差が顕著になる。このことも踏まえ、次の3点について比較結果を検討する。

「図4／図8 一人あたりの問題作成数の平均値」において、5月実施の検査問題における本校生徒と他校生徒の問題作成数の推移の差が、

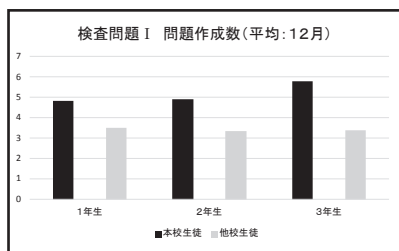


図8 生徒一人あたりの問題作成数の平均値の比較

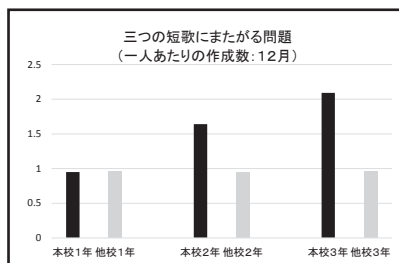


図9 三つの短歌にまたがる問題の生徒一人あたりの問題作成数の比較

統計的に有意か確かめるために、有意水準5%で両側検定のt検定を行った。結果は、生徒  $t(746)=3.94$ 、 $p < 0.01$ で、一人あたりの問題作成数の平均値の差は有意であることが分かった。他校生徒の問題作成数の平均値の伸びが「+0.39」であるのに対し、本校生徒の問題作成数の平均値の伸びは「+0.98」である。本校の取り組みが、多角的思考力の育成に効果的であったことを示すものとする。

「図5／図9 三つの短歌にまたがる問題の一人あたりの作成数」においても、上記同様の目的で有意水準5%で両側検定のt検定を行った。結果は、生徒  $t(746)=1.82$ 、 $p < 0.01$ で、三つの短歌にまたがる一人あたりの問

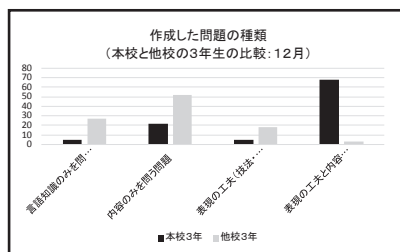


図10 作成した問題の種類の比較(3年生)

題作成数の平均値の差は有意であることが分かった。他校生徒の問題作成数の平均値の伸びが「+0.08」であるのに対し、本校生徒の問題作成数の平均値の伸びは「+0.26」である。本校の取り組みが、重層的思考力の育成に効果的であったことを示すものと考ええる。

「図6／図10 作成した問題の種類の比較(3年生)」においても、上記同様の目的で、有意水準5%で両側検定のt検定を行った。結果は、生徒  $t(746)=1.34$ ,  $p<0.01$  で、作成した問題のうちエに分類されるものの全体に対する割合の差は、有意であることが分かった。他校生徒のエの問題作成数の割合の伸びが「+0.017」であるのに対し、本校生徒のエの問題作成数の割合の伸びは「+0.12」である。本校の取り組みが、多角的思考力の育成に効果的であったことを示すものと考ええる。

## 5 まとめ

現時点での成果としては、大きく次の三つがあると考えている。

- 中学校における国語学習の在り方を、それぞれの文種における小中の縦のつながりの中で捉え直したこと。
- 「主体的な学習」を展開する上で、「多角的思考力」と「重層的思考力」とを核にした授業改善案を提示したこと。
- 本校がこれまで提案してきた「班学習」を再認識して、「他者との交流」に主眼を置く協働的な新たな学習形態の模索に一步踏み出したこと。

本研究のテーマは「小学校の学びを生かしつつ、主体的な読みを深める中学校国語学習の在り方ー他者との交流から多角的思考力と重層的思考力を高める授業の工夫ー」である。国語科では、本校がこれまで提案してきた「班学習」をさらに進化させ、「他者との交流」に主眼を置く協働的な新たな学習形態に挑戦し、その幅を広げようと試みた。「主体的な学習の確立」をはじめとする国語科のこれまでの研究の延長線上に、今回の研究があると考えたからである。「道半ば」ではあるが、今後も模索し続けたい。

## 6 今後の課題と次研究の全体構想

今後の課題としては、より効果的且つ効率的な課題設定を模索し、新たな

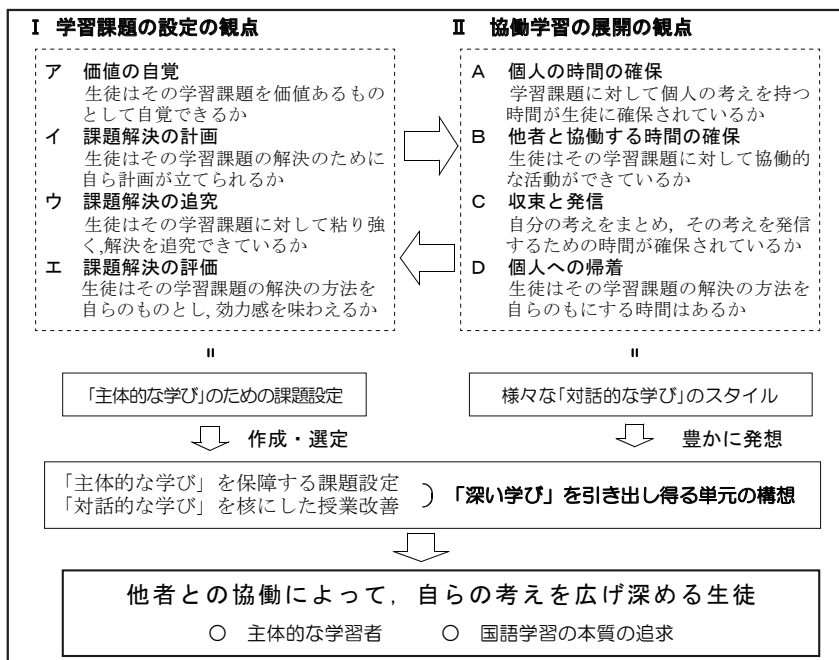
協働的な学習スタイルの構想に繋げていくことであろう。そこで、次研究主題を「他者との協働を通じて自らの考えを広げ深める生徒の育成」、副題を、－「学習課題の設定」と「協働学習の展開」の観点から作り出す単元構想の提案－とした。以下にその概要を記す。

## ○ 次研究の概要

「学習課題の設定の観点」と「協働学習の展開の観点」から、「他者との協働」を通じて、「自らの考えを広げ深める生徒」を育成するために「より効果的な単元の構想とは何か」を模索したいと考え、本研究主題を設定している。国語科における「考える力」の育成とともに、多様な人間関係を結んでいくために必要なコミュニケーション能力を育めるよう「学習課題の設定の観点」と「協働学習の展開の観点」から「他者との協働」を体现し、「深い学び」へと繋がりが得る様々な単元の構想の例を提案したいと考えている。

## ○ 次研究の全体構想

I の観点に立って学習課題を設定し、II の観点に立って協働学習を展開する。そのような単元構想のもとに指導すれば、他者との協働によって、自らの考えを広げ深める生徒を育成できるはずだ。





## おわりに

本研究は、本校研究紀要第51号の発行をもって一応、終結したが、さらなる課題が見えてきたところでもある。アクティブ・ラーニングやディープラーニングに関連させつつ、『主体的な学習』と『国語学習の本質の追求』をどう結びつけるか」といった、これからの課題を踏まえて今後の国語科の実践研究に引き続き全力で取り組みたい。

## ○参考文献

- 1) 岡山大学教育学部附属中学校「研究紀要第19号 全体編」1990
- 2) 岡山大学教育学部附属中学校「研究紀要第48号 国語科編」2013
- 3) 岡山大学教育学部附属中学校「研究紀要第48号 国語科 徳山智夫」2013
- 4) 岡山大学教育学部附属中学校「研究紀要第49号 国語科編」2014
- 5) 岡山大学教育学部附属中学校「研究紀要第50号 国語科編」2015